

川ごみの根本解決を目指す！

～容器包装類の削減で川や海をきれいに～

全国川ごみネットワーク事務局 **伊藤 浩子**

1. 荒川クリーンエイドでは、 「調べるごみ拾い」で意識向上

奥秩父を源流とし、埼玉県、東京都を流れ東京湾へと注ぐ荒川。本河川では1994年から「荒川クリーンエイド」として産官学民が協働したごみ拾い活動が行われています。近年では、毎年、約150会場、のべ約1.2万人が参加しています。この事務局を担うNPO法人 荒川クリーンエイド・フォーラムでは「調べるごみ拾い」に取り組んでいます。ICC (International Coastal Cleanup) に準拠した調査カードを利用し、種類ごとにごみの個数を数えながら拾っています。調査結果を図1に示します。ペットボトルが群を抜いて多いことがわかります。参加者は「調べるごみ拾い」を行うことで、ごみの一つひとつに目を向け、ごみの種類を意識し、どのようなごみが多いかを実感することとなります。さら

に、活動後には、「ふりかえり」の時間を設け、ごみの発生原因や影響を考えるようにしています。これにより、単純な美化活動に終止せず、日頃からごみの減量を意識してもらうことを目標としています。調査結果は事務局で集計し、ごみ削減に向けた発信を行っています。

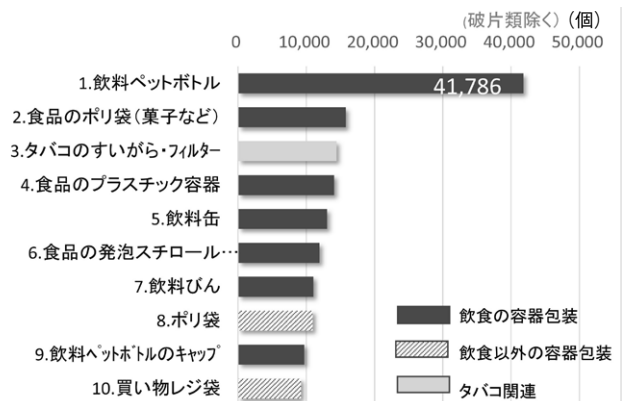
2. 拾うだけでは、なくならない

回収された飲料容器数の経年変化をみると、ペットボトル販売量の増加に伴い、ペットボトルの数が飲料缶に代わり急増しています(図2)。このように河川のごみは私たちの生活や社会を反映するものといえるでしょう。

同一の場所で定期的な複数回のごみ拾い活動を実施すると、明らかにごみは少なくなります。しかし、水際にはごみが次々と漂着することからなくなることはありません。

河口近くのヨシ原において長年たまっていた大量のごみがヨシ刈りによって表出したところもあります(写真1)。

ここでは、2回の活動で合計176人が活動し、1,480袋(45L)の人工系ごみを回収しました。ペットボトルだけで662袋、推計約2.1万本を回収しました。



(c)NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラム
図1 2016散乱ごみ上位10

3. 河川ごみの 根本解決に向けて

川のごみは早期回収が重要で、降雨による洪水等によって海へと流れ出てしまいます。また、最近国際的にも課題となっているマイクロプラスチック化することになります。早期回収の継続も大切ですが、これではこの問題はいつまで経っても解決できません。

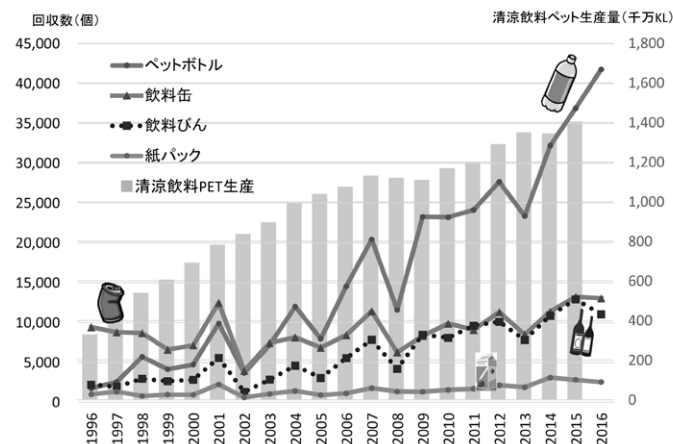


写真1 荒川の水際(河口より約3km、H28年2月)

そこで、大きな河川に入る前に、排水路や樋門・排水機場等で回収方法を探ることや、河川内のごみがたまりやすい場所で効果・効率的に回収する手法が模索されています。何よりも排水路等から川を通じ海へ出る前に、流域全体の街なか・私たちの生活の中から、ごみとなるものを削減していかなくてはなりません。

4. 全国的なネットワークで

川ごみは全国の多くの川で課題となっています。川で活動する多くの団体とともに川ごみの根本解決を目指すため2015



※清涼飲料ペットボトル生産量は、(一社)全国清涼飲料工業会の容器別生産量の推移より
(c)NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラム

図2 飲料容器回収数の推移

(平成27)年に全国川ごみネットワークが設立されました。

全国川ごみネットワークでは、多様なセクターが一堂に集まり意見交換をする「川ごみサミット」の開催、身近な水辺のごみへの関心を高める「水辺のごみ見つけ!」の呼びかけなどを通じ、川ごみの解決に向けた情報発信、情報交換や協働を行っています。

さらに、荒川でも全体の70%以上を占める容器包装類のごみについては、私たちの生活の中から削減しなくてはなりません。今後、リサイクル関連団体等多様な主体と連携し、大きな運動となって容器包装類を削減することが川ごみの課題解決の一つと考えています。

図1、2、写真1の典拠：
NPO法人 荒川クリーンエイド・フォーラム



写真2 荒川護岸で回収したマイクロプラスチック